

ルンビニをめぐる対話の最前線

——インド・ネパール国際会議に参加して考えたこと——

公益社団法人日本ネパール協会 理事・佐々木一憲

2026年1月末、私はインド・ニューデリーで開催された「グローバル・ディプロマシーと地域協力：仏教遺産をめぐるインド＝ネパール・パートナーシップ」と題する国際会議（South Asia Foundation 主催）に参加する機会を得ました。本会議は、インドとネパールの関係を、仏教遺産という共通の文化的基盤から捉え直そうとするもので、学術関係者だけでなく、文化関係者や政策に関心を持つ人々も参加する、やや異色の国際会議でした。

私はふだん、大学で仏教学・文献研究に携わっていますが、同時に日本ネパール協会の理事として、ネパールとの民間交流や文化的つながりにも長年関心を寄せてきました。そうした立場から見ると、今回の会議は、学術・文化・国際関係が交差する、非常に示唆に富んだ場であったと言えます。

仏教遺産をめぐる「協力」というテーマ

会議全体の中心テーマは、仏教遺産を「競合」や「主張」の対象としてではなく、「協力」の基盤として捉え直す、という点にありました。とりわけ焦点となっていたのが、釈尊誕生の地として知られるルンビニを含む、ネパール南部からインド北部に広がる地域です。

ルンビニは、ネパールを代表する仏教聖地であり、世界遺産としても知られています。一方で、その周辺地域——とくにインド側の遺跡群も含めた一帯は、歴史的には一つの文化圏として機能してきました。国境線が引かれるはるか以前、ここは人々が自由に往来し、思想や信仰が行き交う空間だったのです。

しかし現代においては、国家ごとの観光政策や遺産保護の枠組みが優先され、結果として「分断された遺産」として扱われがちです。今回の会議では、こうした状況を乗り越え、ルンビニを含む一帯を「広域の文化圏」として捉え直す発想が、繰り返し議論されていました。

学術会議であり、同時に外交の場でもある

この会議が興味深かったのは、純粋な学術会議とは少し性格が異なっていた点です。発表内容は学術的でありながらも、背後には明らかに外交的・文化政策的な関

心が存在していました。インドとネパールという二つの国が、仏教遺産という共通の財産をどのように扱い、どのように世界に発信していくのか——その模索の過程が、会場の随所に感じられたのです。

とくに印象的だったのは、「対立点を無理に解決しようとしなさい」という姿勢でした。歴史的解釈や遺跡の位置づけをめぐることは、両国のあいだに長年の議論があります。しかし今回の会議では、それらを正面から争点化するのではなく、「まずは協力できる枠組みをつくる」ことが重視されていました。この慎重さは、実務的であり、同時に現実的でもあると感じました。

日本の存在感とルンビニ

会議の議論を聞きながら、私が改めて考えさせられたのは、日本とルンビニの関係です。実は、現在のルンビニ整備計画の基本構想には、日本人建築家・丹下健三のマスタープランが深く関わっています。この事実は、日本では比較的良好に知られていますが、国際的には必ずしも広く共有されているとは言えません。

日本は、仏教を受容し、長い時間をかけて独自の文化として育んできた国です。その日本が、ルンビニという仏教の原点の地に対して、長年にわたり関心と支援を寄せてきたことには、文化的にも感情的にも深い意味があります。今回の会議では、日本が「直接の当事国ではない」からこそ、対話を促す存在になりうる、という見方も示されていました。

学術の立場から見たルンビニ

私は今回、学術的な立場から発言する機会も与えられました。その中で強調したのは、仏教遺産は遺跡や建造物だけでなく、テキスト（経典）や思想、実践の歴史によっても支えられている、という点です。

釈尊の時代から今日に至るまで、仏教は常に「移動」とともにありました。人が移動し、言葉が翻訳され、思想が再解釈される。その積み重ねの中で、ルンビニは象徴的な意味を持ち続けてきたのです。こうした視点に立つと、ルンビニを一国の遺産として閉じるのではなく、広域的・歴史的な文脈の中で捉え直すことの重要性が、よりはっきりと見えてきます。

今後に向けて

今回の会議では、最終的に「宣言文 (Declaration)」が採択され、私もそれを託されて帰国しました。宣言文の内容は慎重で、具体的な政策提案に踏み込むものでは

ありません。しかし、「対話を続けること」「協力の枠組みを模索し続けること」という意思是、確かにそこに示されています。

ルンビニをめぐる課題は、一朝一夕に解決するものではありません。しかし、今回のような国際的な対話の場が積み重なっていくことで、少しずつ新しい可能性が開かれていくのではないかと—そう感じさせられる会議でした。

日本ネパール協会の会員の皆さまにとっても、ルンビニは単なる観光地ではなく、ネパールという国の歴史と未来を考える重要な鍵の一つだと思います。本稿が、そのことを改めて考えるきっかけになれば幸いです。

